

令和3年8月12日

南の風東京2020オリンピック特集号Ⅱ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

第3Qに入ると、長岡の積極的なドライブを皮きりに勢いづき、パスカットからの速攻も決まりリードを広げる。フランスは4分間得点が止まる。たまたまタイムアウトを取る。タイムアウト明けフランスはようやくフォートゥーがフリースローで得点する。(日本42-37フランス)

その後、今度は集中力を増したフランスのディフェンスの前に、2分間日本の得点が止まる。徐々にフランスのオフェンスが復活しサンドリーヌに8得点を許し、最大8点あったリードが3点まで詰まって第3Qが終了(日本52-49フランス)

第4Qは、出だしからフランスにインサイドを攻められ苦戦し、同点に追いつかれる。ここでリズムを整えるため日本がタイムアウト。タイムアウト明けミスが出た日本だが、長岡、林の3Pが効果的に決まりリードする。再び林のシュートが決まるがフランスもすかさずサンドリーヌが入れ返す。両者譲らない展開の中、高田がバスケットカウント獲得し、フリースローも沈めて流れを呼び込む。

(日本69-68フランス)

そして長岡の3Pシュートが決定打となり追いつがるフランスを振り切り、日本が勝利する。後半だけで11得点(インサイドと3Pシュート)した長岡の活躍が光った。

最終スコアは、日本74-70フランス。

繰り返しますが、私はこの初戦のフランス戦に勝利したことが、日本を大躍進に導いた一番の原動力になったと思います。

オリンピックという大舞台を前に、選手には尋常ではない、不安、緊張、心理的圧迫感があったと想像されます。そんな中、世界ランク4位のフランスとの競り合いに勝ったことで、「やってきたことに間違いはなかった」「絶対いける」という自信を持てたと思うのです。

また、練習したスキル(3Pシュートやハーフコートオフェンス、ディフェンス力)が通用したことも、オリンピックを戦う上で大きな自信となったと考えます。

日本の戦術面を見ていきます。まずオフェンスですが、トランジションの速さが特長です。ディフェンスリバウンドからの速攻が主となりますが、パスカットや相手に得点された後の切り替えの素早さも目立ちました。ハーフコートのオフェンスは、スクリーンをメインとしたファイブアウトのモーションでした。スクリーンを使ったドライブから、ダイブへの合わせやエンドライン沿いの合わせ、そしてキックアウトやエキストラパスからの3Pシュートといった攻めです。全員が踏ん切りよく打っていました。

特に印象的だったのが、町田選手のドライブに対して、逆サイドからのダイブする高田選手、エンドラインから合わせる赤穂選手の合わせです。タイミングが抜群でした。練習量が垣間見えました。

次にディフェンスでは、サイズの大きい相手のポストに対して、ボディアップしたダブルチームやインサイドヘルプでの対応が効果的でした。さらに相手のボール運びに対して、ボールマンディフェンスがラインディレクションし、コフィンコーナーに追い込みダブルチームしてバイオレーションを誘ったり、パスカット狙ったりする戦術も要所、要所で相手を苦しめました。

次号では、決勝トーナメントの戦いについて書きます。